
バカとテストとショタ少年！？

げんげん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとショタ少年！？

【NZコード】

N8905W

【作者名】

げんげん

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣にオリキャラを出してみました

見た目が小学生の健吾。

そんな健吾が明久たちFクラスのメンバーと一緒に
学校で大暴れ！？

初めて書くので暖かい目で見てください

人物紹介（前書き）

どうも、げんげんと申します。
よろしくお願いします

人物紹介

ではさつそくオリキャラ説明からー

神田 健吾（16）

文月学園に通う高校生。

幼い容姿で、たびたびではなく、ほとんどの確率で小学生に間違えられる。

でも中身はすごく大人・・・・ではなく黒い。

でも面倒見はいいため、外見のことがなければ

お兄さん気質

明久、雄二とは悪友。

料理とか得意。

得意科目は理科

苦手科目は国語

所属はFクラス

召喚獣は小学生の制服を着ている。

武器は文房具

腕輪の能力は「急成長」

能力の内容については、本編を読んで
確認してください

人物紹介（後書き）

とりあえず人物紹介でした

こんな感じで書いていくので

感想 アドバイスなどあつたらお願いします

プロローグ（前書き）

プロローグです

Fクラスのメンバーはまだですが

明久はです

プロローグ

空を見上げると満開の花びらが、空いっぱいに咲いていた。
「そんな日でなければ、少しくらいは楽しい気持ちになれたのだろう。しかし、俺にはそんな気持ちになれない理由があった。
それは、この校門をくぐった先にある。

「おい、なんの用だ？ つて榎田か。小学生かと思つたぞ」

校門に立つている鉄人—西村先生が笑いながら言つ。思わず拳を握るが、鉄人には勝てないことがわかつてるので慌てて手を引っ込める。

「遅刻だぞ。とりあえず、お前にはこれだ」

鉄人に、封筒を渡される。これが俺が今日憂鬱だった理由の根源だ。新学期、誰でも憂鬱になるだろ？

「お前は特別にもう一度振り分け試験をしてもいいんだぞ？」
「いや、こうなつた以上はしうがないつす。それにー」

俺は、校門を目指して走つてくるバカを見る。

「どうせ、あいつも一緒なんでしょう？」
「それもそうだな」

明久は息を切らしながら鉄人を見て、それから俺を見た。といつても俺の横顔だけだけ。

「あつ！？ 鉄人が小学生に手を！！」

「出してない！ よく見ろ、お前もよく知つてゐやつだらうが！！」

」

「ほえ」

明久がいかにもバカっぽい声を出す。もつこいつを殴ればいいかな？

「あつ、なんだ健吾か」

「健吾か！じゃねえよ」

俺が不機嫌そうな声を出すと明久は顔の前で手を合わせた。

「『めん』めん、じゃつ鉄人ーじゃなくて西村先生、ぐださい」

明久は鉄人の前に手を出す。いまさら呼び方直してもおそいと思つがな。

「もういい。早く教室に行け。遅刻だぞ」

「はーい（へーい）」

俺と明久は校門へ向かつた。隣では明久がうれしそうに封筒を破つてゐる

「なんだお前。『機嫌だな？』

「だつて健吾に勝つると思つたらや」

「どうじつ」とだよ

明久は二口二口顔で俺を見る。

「いや、健吾はFクラスでしょ？ 今回のテストの調子良かつたん

だ、僕はきっとクラスくらいに・・・

明久の手が止まる。まあこいつが行くクラスなんて決まってるがな。

「健吾、一年よろしく」

若干暗くなつた明久の手には、大きくFと書かれた紙が握られていた。やつぱりか。

俺は、若干の不安を感じつつ、目の前の無駄にでかい校舎を眺めた・・・。

プロローグ（後書き）

「ひつゝ、我ながらの駄文。

がんばつて直していくたいと思います。

次回からはFクラスメンバーも出ますので、お楽しみに！

第一問 俺と雄一と問題クラス（前書き）

サブタイトルとかタイトルとかそういうネーミングセンスが酷無です
だれかやさけてください。

と、まあこんなもんで、始まります

第一問 俺と雄一と問題クラス

Fクラスの教室についた俺は、教室の見た目を見て唖然とした。ここに来る前に見たAクラスは見た目もきれいだつたというのに、なんだ? ここは見た目もボロボロ。Aクラスをあんなにするんだつたら、その金をここにまわせつての。

思わずため息をこぼすと、明久がなにやらそわそわしているのに気づいた。どうせ、遅刻したから変な印象を持たれたりとかするんじゃないかと思つてゐるんだろ? う。

俺は明久の代わりにFクラスの扉を開けた。

「すいません、遅れましたー」

「早く座れ、うじ虫やろ・・・う・・・! ?」

「あれ? 雄一なんでそんなとこ? ー」

俺の言葉をさえぎつて、雄一が教室から飛び出し、俺を廊下に連れ出した。

えらくあせつてゐるが・・・なんだ?

「雄一? どうしたの、慌てて。健吾になにか用? 」

「そうだぞ。突然引っ張つてきやがつて」

明久が驚きながら雄一を見る。雄一は息を整えてから俺を見た。

「健吾、なんでFクラスにいるんだよー。お前ならAクラスなんて簡単に・・・」

「雄一知らないの? 健吾テスト受けてないから」

正確に言えば、受けようとはしたけど、受けさせてくれなかつただ

けどな。

「教師に迷子の小学生と間違えられたんだよ。そんで説明が終わって、
た時にはテストが終了してて、
無得点扱いってことだ」

今、説明しても腹がたつ。あの教師、新米か知らないが、俺の顔を見るなり

「僕?迷子かな?大丈夫?」

なんて言つてきやがつた。説明しても納得しないし。そういえばあいつ見てないな。

「そうなのか・・・。たくつ、なんだつてこのクラスに・・・」

雄一が焦つたように言つ。二つがこんなに動搖するのは初めてみたな。

「どうしたの?雄一」

「お前らは今來たから知らないかもしねないが、あのクラス、Fクラスはだいぶ問題がある」

「問題? 成績とか?」

「それもあるけどな。たとえば秀吉だ」

秀吉? あいつもFクラスなのか。まあ演劇バカだしな。

「あいつがクラスに入つた瞬間大騒ぎだぞ。健吾なんか入つたら・・・

・

「入つたら?」

雄一がちらりと俺を見る。なんだか俺を哀れむように見ていた気がするが、あまり気にしないほうがいいのかもしない。

「良くて誘拐だな」

「悪くてじやなくて！？」

良くてつて、悪かつたらなにされるんだ？いや、そういうじゃない。平気で誘拐するつていつたいどんなクラスなんだよ。

「まあ俺たちもいるしな。平気だな」

「そうだよ。もしもの時は兄ちゃんたちが一つで健吾！僕の関節はそつちには曲がらなーー」

「俺たちがいなくても・・・平気かもしれないな」

明久に関節技をかける俺を見て雄一が言ひ。誰が兄なんだ！同じ年だつつの！！

だいぶ遅れて教室に入る。どうやらまだ教師は来ていないようだつた。俺は雄一と明久の後ろにいるという形で、まだ教室には入れていないが、中はよく見える。畳にちやぶ台。思わずため息が出るほどの光景だなこれは。

「みんな悪い。少し遅れた」

まずは雄一が教室に入った。団体ばかりでかい雄一がどいたため、さらに視界が開ける。おっ、秀吉もいるけど、ムツツリーーーもいるじゃねえか。

「おい、代表、少し質問があるんだが」

代表？ ああ、このクラスの代表が雄二つてことか。雄二の下につくってのはいい気がしねえが、このクラスを動かせるつてところなら得かもしんねえな。

にしても、雄二はこのクラスをひどい言い方してたが、今雄二に話しかけたやつみたいにまじめそうな奴もいるじゃねえか。誘拐なんてするわけが・・・

「さつきの少年は誰の弟だ！ なんなら、一日教室に・・・」
「おい、あいつあの子を独り占めする気だぞ！」「待て！ あの子をひざの上に乗せるのはこの俺だ！」「なんだと！ 俺はあの子にお兄ちゃんと呼んでもらいたい」「俺たちがお兄ちゃんになればいいだろ？」「『それいいな！』」「

前言撤回。なんだこいつらは？ 少々、身の危険が・・・。いや、むしろ体中に悪寒が・・・。

「健吾ではないか。久しぶりじゃのう」「・・・久しぶり

声のするほうを振り返ると、秀吉とムツツリー二が立っていた。秀吉は相変わらず・・・女みてえだな。ムツツリー二も、ずっと俺と秀吉撮つてるし。

「あれ？ どうしたの、二人とも」「さつき健吾が見えての。前の扉から出てきたのじゃ・・・奴らにばれたら危険」

「こつらは、なんでこんなに慣れるのが早いんだ？」

「秀吉は大丈夫だったのか?」

「俺が聞くと、秀吉はとたんに暗い顔をした。

「数分であんなに告白されたのは初めてじゃ」

やつぱり秀吉も被害を受けていたらしい。もつ、家に帰つてもいいのかな?

「君たち、教室に入りなさい」

声に振り返ると、教師が立つていた。なんか、弱そうだな。こいつ本当に教師か? てか、この様子で教室に入るのは危険だと。。。

「健吾、僕の後ろにいるんだよ」

「あ、おひ」

明久の後ろに隠れながら、教室に入る。悔しいが、明久がかべになつているおかげで俺の姿は見えていらないらしい。とりあえず近くの席に座る。

「おい、あれやつきの子じゃないか?」

「なに! 吉井の弟だったのか!」

「じゃあ吉井を倒した奴がお兄ちゃんに」。。。

やつぱり見えていたらしい。そして明久の命に危険が。。。

「吉さん、静かにしてください」

教師の声が聞こえる。一瞬はその声で静かになるも、ひそひそ声は

止まらない

「でも、制服着てるぞ」

「つてことは高校生なのか？」

「いや、カモフラージュかもしれない」

「吉井が心配でついてきたのかもしれないぞ」

「「「けなげだなあ」」」

なんだかあらぬ誤解を受けている気がする。

「よろしく頼むぞい」

秀吉の言葉で初めて気がついた。どうやらすでに血口紹介が始まつていたようだ。

「・・・土屋 康太」

おっ、次はムツツリー二か。じゃあ次は・・・あれ? あいつどつかで見覚えが。

俺の視線の先にはこのクラス唯一とも言える女子生徒が座つていた。あのポニーテール、見覚えがあるな。

「趣味は、吉井を殴ることと、健吾のお守りをすることです」

こんな迷惑な趣味をもつ女はあいつしかいない。島田 美波。あのやうう。Fクラスだったのか。俺と明久に向かつて手振りやがつて。女子だからつていつまでも何もしないと思うなよ。

明久の前の奴が話し終わり、明久が立ち上がった瞬間――

「すいません！ 遅れちゃいました！」

見覚えのある、ここにいるには似合わないあいつが入ってきた。

第一問 俺と雄一と問題クラス（後書き）

なんだか数人空氣な気が

まあ気にしないでいきましょう

第三問 俺と姫路と血口紹介（前書き）

やつぱりサブタイが・・・。

誰かネーミングセンスをブリーズニー

といえず、姫路さんが出てきます。

第三問 俺と姫路と自己紹介

扉を勢いよく開けてはいつてきたのはこのクラスに似合わないあの女。Aクラス確定とされた姫路 瑞希だった。

「姫路さん。自己紹介の途中ですので、好きな席に座つてください」「はい」

姫路は若干息を荒くしながら席につく。遅れそつだからって走ってきたんだろう。

「よ、吉井 明久です」

明久が姫路のことを気にしながら自己紹介を始める。

今、低い声でダーリンとか聞こえたが、聞き間違いだよな。きっと。

明久が座るのを確認すると今度は俺の番だ。立ち上ると妙な歓声があがる。

「あの子だぞ」

「本当だ。ちやんと自己紹介できるのか?」「がんばれ、お兄ちゃんたちは見てるぞ」

お前らみみたいな兄を持つたことはない。

「えっと榎田 健吾だ。吉井とくねりと同じ歳だからな

兄ちゃんとか言って騒いでたやつをじろりと見る。座るとまた話し声が聞こえてきた。

「えらいぞ、よく一人でできたな」

「えりいえりい」

なんかまだ子供扱いされてる気が・・・。こっぺんあこひらじめるか？

「なんだこんなとこにいるんですか？」

突然の質問に周りを見る。もう話してから時間は経ってるし、俺に向けてじゃないことは確かだが・・・

誰だ？あんな失礼きわまりない質問をする奴は。質問されるやつは相当の嫌われ者か、有名人だな。

「えっと、それは・・・」

質問を受けていたのは姫路だった。どうやら俺の次だつたようだな。つてことは理由は後者つてことか。

まあ姫路は有名だし、疑問に思つても仕方がないが・・・。結構騒ぎになつてたと思うがな。ここからはテスト中に寝てたのか？その後も噂になつてたぞ。

「テスト中に熱が出て途中でやめたんだよ。
無得点扱いつてやつだ」

別にそんな義理もないが、助け舟をだしてやる。まあ無得点扱いつてどこには俺も一緒だしな。

「榎田・・・くん？」

突然の俺の声に姫路が目を丸くする。さっきから何も言わないなとは思っていたが、まさか今、俺の存在に気づいたとか言つんじゃないだろ？ って、明久の影になつて見えなかつたのか。

「俺も無得点。まあ引き分けだな」

「健吾？ 引き分けって？」

明久がきょとんとした顔で聞いてくる。あれ？ 俺、こいつと一緒に悪さしてなかつたけか？ ジャあ知つてるはずだと・・・。

「明久、健吾は姫路と学年トップを争つてたんだ。お前だつて知つてるはずだろ？」

「え？ ああ、そんな噂もあつたつけ？」

「噂じゃねえ。事実だ。あと、争つてはない。周りが離し立てただけだ。まあそれに乗つかった俺も原因はあると思つけど。」

「よ、吉井くん！？」

姫路がさらに目を丸くする。って、俺の存在に気づかなかつたのは仕方がないが、明久にも気づいてなかつたのかよ！ こいつ、どんだけ周りを見てないんだ？

「こちにちは姫路さん。身体の具合は「おい、姫路。もつ身体は平気なのか？」・・・」

明久の言葉に雄一の言葉が重なる。ああ、明久が分かりやすく落ち込んでいる。ここまでくると不憫だな。

「そこの人達、静かにしてくださいね」

教師が教卓をとんとんと叩いた。その瞬間、教卓がバラバラに崩れる。つて、どんだけボロボロなんだよーこの教室はー！

「ちょっと替えを取つてきます」

教師が、教室を出る。さすがに教卓の替えはあるのか。またボロボロじゃないだろうな。

そんなことを考えているうちに、明久と雄一が廊下に出る。大方、姫路のことだろ？

明久の性格を考えりや、予想もできる。

「あ、あれ？ 吉井くん、まだ授業は終わつてないですよ？」

姫路が廊下に出よつと立ち上がる。たくつ、じいつもおつせかいだな。まあ自分のことで話し合つているとは夢にも思つてないんだろうけど。明久のためにもとりあえずとめとくか。

「おい、姫路。ほつといつやれ」

「どうしてですか？」

「男にはいろいろあるんだよ。それに、そろそろ戻る」

「へ？」

明久と雄一が教室に入つてくる。ついでに教師もよたよたと教卓を運びながら教室に入つてきた。

「坂本くん、自己紹介がまだでしたね。あなたが最後です」

教師の言葉に雄一はどこか決意をこめたような表情で立ち上がった。こいつがこいついう顔をするときは、なにかおもしろいことをしていく

れるんだよな。

雄二が教卓の前に立つ。

「Fクラス代表、坂本 雄一だ。ところで、皆に一つ聞きたい」

雄二が、教室をゆっくりと見渡す。それにつられて何人かの生徒も教室を見渡す。これは相手を引き込みやすくするための雄二の技。交渉術では俺も雄二に勝てない。

「皆、不満はないか?」

「――大ありじやああああああ――」

クラスが沸き立つ。まあこんなボロボロ設備じやあ、嫌気も差すわな。せめて畳じやない床にしてもらいたかったよ、俺は。

「そこで提案なんだが・・・」

雄二の言葉にクラスがしんつとなる。

「Aクラスに試験召喚戦争をしかけてみないか?」

雄二の言葉にさつきとは違つたざわめきが起つる。

「勝てるわけがない」

「そうだ、これ以上レベルを落とされるのも嫌だ」

「女子三人と第一人がいるんだ、もう十分だ」

一人、意味の分からぬやつもいるが、確かにそうだ。Fクラスはバカの集まり。頭のいいAクラスに勝負を仕掛けようなんて、どうかしてるとしか思えない。

「いいか、もしかして弟って俺のことじゃないだらうな。

「いいか？ このクラスには△クラスに勝てるほどの人材がそろつているんだぞ？」

「それはどういふことだ？」

「いいか、まずは康太だ。おい、健吾を撮つてないでこいつちにこ

ムツツリーーが俺の後ろからぶんぶんと顔を振つて、前に出る。つて、まさかこいつ、俺の写真売りをばくつもりじゃ・・・。去年もやられたからな。どうせ撮られるなら、撮影料でも請求しつくか。

「こいつはかの有名な寡黙なる性識者だ。セイシキザイ」

「なに！？ あいつが！」

「でもあいつ、建ちゃんもそつだが、秀吉のことも撮つていた」「ということは本物か！？」

次々と声があがる。てか誰だ、俺のこと建ちゃんなんて言つてるやつは。

「次に、姫路と健吾だ。」

クラスの視線が俺と姫路に向かられる。姫路はなにを言つているのかさつぱりとこいつ顔で雄一のことを見ていた。

「姫路は、有名だから皆実力は知つているな。そして健吾、こいつは姫路と同じくらいの学力を持つていてる。」

「なんだと。あのちびっ子がか！？」

「やうかそうか。兄ちゃんは鼻が高いぞ」

だから誰だよ！…さつきから勝手に兄面してゐやつは。あと、いつ
いつときは「兄ちゃん」
じゃなくて「義兄ちゃん」な。って、どっちも認めるか！

「そして、秀吉。俺も力にはなれる」
「あいつは、姉がAクラスの・・・！」
「坂本も確か昔神童と呼ばれてたとか」
「もしかしたら本当にいけるんじゃないか！？」

クラスの士氣があがる。まあさすが雄一だな。

「最後に、明久だつている」

－ シーン －

やつぱり、雄一のやつ、明久をおちに使つたか。

「誰だ？そいつ」
「あいつだよ。ダーリン」
「ああ、ダーリンか」
「やめてえ、ダーリンって呼ばないでえ！…」

明久が叫ぶ。まあ女子ならまだしも男子に言われりやあな。でも明
久、これは自業自得だ。

「明久は観察処分者だ。まあ、健吾もだがな」

クラスがざわめく。

「観察処分者つて確か・・・バカの代名詞だったよな」

それには一部、間違があるが、概ねあつてるな。

「待て、それでは健吾がかわいそうだ。観察処分者は……いわば問題児につけられる称号だな」

雄一がフォローを入れる。

「ち、ちよつと、僕は？僕はかわいそうじゃないの…？」

明久の嘆きが聞こえるが、無視だ。俺も、お前と一緒にされたくない。

「こいつの利点は……そうだな。召喚獣が自由に動かせる」

そう、雑用とかやらされるからな。そこらへんのやつらよりは細かい動きになれているところがある。そのかわり、フィードバックもあるがな。

「ちょっと待て。でもダメージが自分に返ってくるだらつ。そんな簡単に召喚できないんじゃないのか？」

「そうだ！ 建ちやんに危ないことさせられん！」

「やっぱその話には乗れない！」

さつきまでの士気が嘘のよつて下がつてく。これには雄一もおとあげのようだつた。

雄一、そもそもこいつなつたのは明久の名前を挙げたお前のせいなんじや……。

（おー、健吾、このままじややまない。力を貸してくれ

雄一が小声でいう。

(なつ、俺にあれをやれっていつのかー?) (頼む。あいつのため

(二)

雄一が明久を見る。明久は慌ててクラスの連中をなだめていた。確かに、あいつは姫路のためにやつてるんだもんな。仕方ない。

(雄一、借りは返せよ)

(おひ、すまん)

俺はクラスの連中の前まで歩くと、できるだけ近くのやつに聞こえようとして囁く。

「僕・・・信じてるよ。僕になにかあってもお兄ちゃんたちが助けてくれるつて。だから・・・」

少し、俯く。

「やひひよ。僕、お兄ちゃんたちの活躍、見たいな

できる限りの上目使い。これはある意味での俺の交渉術だ。って、反応が薄いな。もしかして失敗か?

「――YES! マイブラー!――」

どうやら、効くまでに時間がかかったらしい。でも士気は再びあがつたようだ。でも、誰がブランザーだ。

「よしひ、お前らー! ペンをとれ! まずはDクラスから攻め落とすぞー!」

こゝで俺たちの試験召喚戦争は始まつた。

第三問 俺と姫路と血口紹介（後書き）

文字数がよく分からぬ。

自分ではじめた書いているつもりなのですが・・・。

どのくらいがいいんですかね。

小説つて書くの難しいですねえ。

このサイトで小説書いてる人たちを尊敬します。

なんだか毎日更新してますね

それくらい暇なんですよ休日つて

てなわけではじめます

姫路と俺と忘れかけのトラウマ

試験召喚戦争を始めるにはまず、対象クラスに戦線布告をしなくてはいけない。

問題はその使者だが・・・。

「明久、お前、Dクラスに行つて、戦線布告して来い」

「雄一の指名により、明久が使者となつた。

「でも、ひどい目にあつたりとかしないの」

「平気だ。Dクラスは安全だ」

「本当?」

「ああ。俺は友人をだますようなことはしない。」

「分かつた、行つてくるよ」

明久が意気揚々と教室を出て行く。雄一はこう見えて仲間思いのいいやつだ。確かに友人をだますようなまねはしない。友人は。

・・・数分後・・・

「ひ、ひどい目にあつた」

明久がボロボロで帰つてきた。そう、雄一は友人をだますようなまねはしないが、駒は平気でだます。これが戦場では必要なことだ。

「ちょっと雄「よしつ、これでひと段落だな」

「ねえ雄「今から、飯でも行くか」

「雄一!...」

「なんだよせつときかひ」

あつ、聞こえてたのか。‘つまい’とスルーしてたからてつせり聞こえてないのかと思つてた。

「雄二！僕をだましたな！」

「いいか明久。戦争に犠牲はつきものだ」

「だからつて僕を犠牲にするなーー！」

「悪い悪い。代わりに昼飯おごつてやるから、機嫌直せ」

「えつ？ 本当。ラッキー」

明久、前から思つてたけど切り替えが早いな・・・。

「昨日から塩と水だつたからなあ。栄養をしつかりと取つておいつ

「そうじやなくて毎日栄養は取れ」

「だつてー お金ないし」

明久のせいだけだ。

「吉井くん、よければ明日、お弁当作つてきましょつか？」

「えつ、本当？」

「よかつたな。明久。栄養がとれる上に女子の手作りだぞ」

手作り・・・。姫路の・・・。もしかしてこれは止めたほうがいいのか？

「ふーん。瑞希、優しいのね」

島田が不機嫌そうに言つ。いや、優しいといつよつも「ねはおせつかいだろ。

「よければ皆さんの分も作りますよ？」

余計なことを。明日は死んでも弁当を持って来よう。でないと死ぬ。

「本当か？」

「・・・うれしい」

「ではお言葉に甘えようかの」

なにも知らない奴らが。もしかしたら止めるよりも身をもつて分かれさせたほうが、こいつらのためにはなるのかも知れない。うん、すぐに対処をすれば死はないし。

「神田くんはどうですか？ またクッキーを持ってましょうか？」

「また？ どういうことだ姫路」

ク、クッキー……。あの殺人兵器のことか？

「神田くんのことを昔、小さな子と勘違いしたことがあります……。そのときに持っていたクッキーをあげたんです。」

忘れかけていた記憶がよみがえる。教室で一人寝ていたら、あいつがやってきて、

「迷子ですか？先生を呼んできますから。これ、食べて待つてください」

なんていいやがった。ああ、思い出すだけで震えが……。

「なんだ、そういうことか……って健吾、どうした？」

「す、」「い震えてるよ？」

「ナンデモナイヨ。ヘイキダヨ。オーライチャンタチ」

「雄一 大変だ！健吾が壊れた！」

「ほ、保健室だ保健室！」

雄一と明久に連れられ保健室へと連行される。忘れかけていたトラウマだったのに。

その後、クッキーを見るだけで震えが止まらなかつたぞ。

「そういうえば、あの日から榎田くん、私の顔をみるだけでああなつていきました。

先生を連れてきたときにぐつすり眠つていたから、そのときに悪い夢でも見たんでしょうか

教室を出る直前、そんな姫路のつぶやきが聞こえた気がした。

なんかひょこひょこ色々なキャラが空気になつてますね。

危ない危ない。

さて、あとがきのネタもなくなつてきましたといひで小話を一つ。

実は、健吾と同じく、自分も小学生に間違えられることがよくあります。

高学年くらいになると間違えられても仕方ないですが、

明らかに低学年から中学年、1～4年生あたりに間違えられている気がします

旅行先のみやげ物屋で買い物をすると、「一人で買えてえらいねえ」

といわれます。別に不安な顔をしていたわけではありません。

とこつか、自分も高校生です! 買い物くらい一人でできます!!

てか、何回も買い物に行つてます!!

しかも、ボクって言われるんですよ…?

ボクじゃないし…。そこはお兄ちゃんつて言つてください…。

原因はなんでしょうか? 服装…。ですかね?

うん、服装だー。やつこつひとつひとつねーーー。

つてわけで次回予告ー

次回からできれば試験召喚戦争にいきたいですね。

まあがんばります

俺といちごと教室での出来事（前書き）

今回ま瑞希、健吾、雄一が中心になりそうですね。

俺と姫路と教室での出来事

「おい、一ノ瀬ちの隊は全滅だ。応援頼む！」

「一ノ瀬ちもだ！ 点数補充の時間をくれ！」

教室に数人が駆け込んでくる。今は試験召喚戦争の真っ最中だ。俺と姫路は雄一の命令で教室待機。どうやらできるかぎり俺と姫路の存在を知らせたくないらしい。

「俺たちはなにもしなくていいのか？ 本当に？」

「ああ。明久もいるしな。できればお前らは使いたくない」

横に座っている雄一が言つ。ここにもなんだかんだで明久のことを信頼してんだな。

「ぬう。疲れたのじや」

秀吉がフラフラになりながら入つてくる。どうやら戦死はしていないようだが、点数はだいぶ削れているみたいだな。

「秀吉、どうなつてる？」

「はつまつ言つてぎりぎりじゃな。明久もがんばつておる」

ぎりぎりか。まだAクラスとも戦つてないのにこのままで平気なんか？

「離しなさい！ 絶対に殺してやるんだからあー」

なにか物騒なことを言ひながら、島田が入つてくる。島田を連れて

いるのは・・・誰だつけ？

「おこ、どつした島田」

「吉井の奴。絶対に殺してやる」

ダメだ。全然聞こえてないらしい。

「健吾、島田を止められるか？」

「まあ」

絶対に使いたくない手をやる」となるがな。

「なら頼む。」の島田を冷静にしてやつてくれ

雄二の言葉に若干のため息をつく。確かに島田の力は必要かも知れないが、明久がらみなら別にいいんじゃないか？

なんて考えつつ、島田の前に行く。島田は未だに我を失つているようであがまくつっていた。

「お姉ちゃん、怖いよ？　どつしたの？」

島田の制服の裾をくいくいと引っ張る。島田は我に帰り俺を見る。もう一押しだな。

「僕、僕ね。優しいお姉ちゃんがいいな」

笑顔でそつこいつと島田の目に光が戻つてこくのが分かった。

「うんー、めんねー」

島田が俺を抱きしめ、ぐるぐると振り回す。田が回って気持ち悪い。

「島田。戻つたら試験を受けてくれ」

「あつ、うん」

島田が机に向かう。雄一はなにか考え方をしているようだ。俺と同じこと考えているんだろうけどいい打開策が見つからないようだな。珍しい。

「雄一、どうやって時間を稼ぐ?」

「そうだな……、あつ！」

雄一が俺を見てなにかをひらめいた様な顔をする。その顔がこいつは悪巧みを考えた時の顔。嫌な予感しかしない。そしてその予感は恐らく現実となるんだろうと、安易に想像できた。

試験召喚戦争の様子はそれはひどいものだった。ひどいっても、鉄人に連れていかれるクラスメイトたちの嘆きがひどいだけだけどな。

「戦死者は補習ーーー！」

「やーめーーー！」

あつ、また一人補習室行きになつた。俺もそろそろ動こうかと腹をくくる。

すると、それを待つていたかのように、放送が鳴つた。

一ピンポンパンボーンー

「校内にいる皆様にお願いです。校内で小学生が迷子になりました。

見つけ次第、職員室までお願ひします」

一ピンポンパンポーン

放送が終了する。当然誰も迷子になっちゃいない。これは雄一が放送した偽の放送であり、俺への開始の合図だ。若干気は乗らないが、仕方が無い。

ため息をつくと、ちょうどロクラスの生徒が出てくる。さすが雄一、やつぱりここが一番ロクラスが多いようだな。

俺はゆっくりとその集団に近づく。もちろん、うつむき、演技をしながら。

「う、うえーん。」「うーん」

「ん？ あー、この子放送のー？ おい、皆、ちょっと来てくれー！」

一人の合図でぞろぞろとロクラスの生徒がやってくる。

「お、おい。大丈夫か？」

一人が話しかけてくる。命令だとできるだけ連れ出せ、だったな。もう少ししじだけやってみるか。

「う、ひく、うわーん」

俺の声でまた何人かが現れる。このぐらいかな。

「僕？ 大丈夫だからねえ」

一人が俺に近づく。どいつもこいつもガキ扱いしやがって……

！

ボソツ「試験召喚」
「え？」

「なんでもないよお姉ちゃん。だから
「うん。一緒に職員室にー」
「吹き飛べえええええーー！」
「「「えええええーー！」」

集まつて来た奴らを片つ端から切りつける。腕輪の能力は使わない。雄一に使うなつて命令されてるし、ストレス発散はすぐに終わるとつまらないからな。

しかも俺は少しでもダメージを受けるとそれが返つてくる。へタなことをして隙をみせるわけにはいかない。

ちなみに作戦はこうだ。まずは敵の最も集まる場所に味方の生徒が近づく。そこであの放送を流し、俺の存在を示す。そこで、俺が登場し、相手の注意をひく。その間味方が召喚獣を召喚し戦う。最後に俺が全滅させる。まあ、確実に味方は戦死だろうが、これはあくまでも補充試験が終わるまでの時間かせぎ。俺が何人か倒すなら、多少の犠牲は目をつむるらしい。

「戦死者は補習ー」
「「「いーやー」「」」

とりあえずは排除終了つ まあ、Dクラスの連中には悪いけどこれも作戦のうちつてこつた。どの教師を連れてくるかはランダムだつたが、得意な科学だつたし。瞬殺つてとこかな。

「Dクラス代表を打ち取つたぞおー！
「「「うおつしゃあああー」「」」

どこかで歓声が上がる。無事、姫路を代表のもとまで誘導できたらいいな。こりや、時間かせぎしたかいがあるつてもんだ。

さてと、教室に戻るとするかな。

「あつ！ あなたね！？」迷子の小学生はつ！ 「はあ？」

どこからか教師が現れる。確かにいはうだ！高橋だ！どうしてこんなところに

「おひなさん、わい、お姉さんと一緒に行きまつよ」

手を捕まれ、引っ張られる。こいつ力強つ！てかお姉さんじゃなくておばさんだろーー！

「お、俺は小学生じゃ……」
「はーはー。」
「…………」

全然話し聞いてない！？ ちょっ、誰か助けー

そして俺は、職員室で誤解を解くまで監禁されるのであった。

俺と姫路と教室での出来事（後書き）

わたくして、やつと始まつました試験召喚戦争。

これからどうなつまつといひ・・・。

てなわけだ、これからの更新についてです

「この句曰かなにも考えず更新しまくつていたわけですが・・・

話のストックがなくなりました。

そうである一自分は夏休みとか遊びまくつて宿題を忘れるタイプですよー！

てなわけで毎日更新はできなくなりましたーwww

てかなんで今まで毎日更新できていたのか、いまだに不思議です

きつと、テンションあがつて書きまくつていただけでしょうかね。

でも、最初の宣言通り、週に一回は必ず、更新いたします。

ではまた次回ー

姫路と昭久の秘密会議（前書き）

最近やつとじつに慣れてしましました。

他のことと書く余裕も出てしまつたよー

唐笠さん、俺がベジータだー…さん、神夜 露ひさん

感想いつもありがとうございます。

嬉しくて小躍りしていたら親に変な目で見られましたwww

姫路と明久の秘密会議

職員室での俺の決死の説明は約一時間にも渡った。たくつ、鉄人がいなかつたら

俺はどこかの小学校に連れていかれてたぞ。こここの制服だつて着てたのに、気づけよな。

ふう、とため息をつく。そんなことをしている間にすっかり放課後だ。明久たちはもう帰つただろうなあ・・・。

憂鬱な気持ちで教室に入ろうとすると、中で話し声が聞こえた。

「・・・にくつ・・・」

「私の友達も・・・」

「・・・肝臓とか・・・」

内容まではよく分からぬいが、声は明久と姫路で違いない。そして明久の持つている封筒のようなもの・・・まさか!

「おい」

「!?

後ろから声をかけられ、驚いて振り返る。そこには雄一の姿があつた。

「雄一、大変だ!」

「ああ。とうとう明久にも春が「明久が女子と焼肉を食べにいこうとしてるぞ!」はあ?」

「いく」とか、「肝臓」とか単語しか出ていなかつたが、あれはお

そらく焼肉の話だ。そしてあの封筒。おそらくあれは割引券かなにかだ。

そして姫路の「私の友達」というのは一緒に行く面子のことだろう。おそらく、焼肉屋の割引券か招待券をもらつたが、女子だけだとたくさんは食べられない。そこであまりちゃんとした食事をしていない明久も一緒にどうだ、と誘つていたのだろう。畜生、明久めえ・・・。

「お前、明久並だな」

「はあ？ なにがだよ」

明久と同じにはしてもらいたくない。

「いや、なんでもない。お前のカバンは俺が持つてる。帰るぞ」

雄一は哀れむような視線を俺に向かたあと、玄関に向かつていった。俺も急いで雄一を追いかける。

帰り道に聞いたのだが、どうやらクラスの設備は変えなかつたらしい。雄一のことだ、なにか作線があるんだろう。

それにしても焼肉か・・・。あつ、今日の夕飯は豚のしじょうが焼きにしよう。

(いつもして健吾の勘違したまま、朝を迎えるのであつた・・・。)

姫路と明久の秘密会議（後書き）

なんだか他のことキャラが空気な気が
どうにか他のキャラの活躍も書きたいなと
思います！！

バカテスト1（前書き）

神夜 晶さん、感想ありがとうございます

今日は本編の合間の休憩タイム

（作者の）

はじまりはじまりー

バカテスト1

問 以下の意味をもつ「ことわざ」を答えなさい。

「（1）得意なことでも失敗してしまつ」と

「（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる」と

姫路瑞希の答え

「（1）弘法も筆の誤り」

教師のコメント

「正解です。他にも「河童の川流れ」や「猿も木から落ちる」などがありますね」

榎田健吾の答え

「（2）泣きつ面に蜂」

教師のコメント

「たいへんよくできました。むずかしいかんじがよくかけましたね」

・・・テスト返却後の感想・・・

健吾「なんで俺だけひらがなんだよ」

明久「すごいね健吾。蜂なんて漢字で書けたんだ！」

健吾「お前までガキ扱いかよ！！」

問 以下の英文を訳しなさい。（神田くんは除く）

「this is bookshelf that
and mother had used regularly
for

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

「正解です。よく勉強していますね」

神田健吾の質問

「なんで俺だけやらなくていいんですか？」

教師の答え

「きみにえい」はまだはやいです

神田健吾の答え

「早くないし、漢字ちゃんと読みますからーーー。」

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

「訳せたのは*she is*だけですか」

吉井明久の答え

「 * ? @ 」

教師のコメント

「 できれば地球上の言語で 」

・・・テスト返却後の感想・・・

明久「いや、まったくわからなかつたよ。姫路さんはすごいなあ」
瑞希「そ、そんなことないです」

明久「いや、すごいつつて。つてあれ、健吾どうしたの？ 静かだね」
健吾「・・・たい」

明久「ん？」

健吾「俺も普通にテストに答えたい――――――」

バカテスト1（後書き）

自分で見直していくと思ったことー。

ギャグセンないです。自分。

でも今からでも遅くないーー！

頑張って磨きます

つて、どうやれば磨けるんだろ。

姫路と弁当と殺人未遂（前書き）

神夜 晶さん、感想ありがとうございました
てなわけで続きです

姫路と弁当と殺人未遂

翌朝、俺はいつも通りに学校へ向かつ。

教室にはすでに明久たちが待機していた。

ふと明久を観察する。なんだかいつもと変わらない。恐らくまだ明久は焼肉を食べてないんだろう。

女子と一緒にっていうのは少々うらやましいが……いや、そうでもないか。

まあ早くこいつには栄養をとつてもらいたいもんだな。

「どうしたの健吾。僕の顔になんかついてる？」

「いや別に。そういうやあ雄一。俺も補充試験は受けたほうがいいか？」

「おう。姫路もな。できれば点をあげてもらいたい」

「おう（はー）」

前回の補充試験は、急いでたのもあつたからな。時間さえあれば点はとれる。

……うして俺たちは補充試験を受けた。

補充試験が終わつた時、時間はすでに昼になつていた。どうりで腹もすくわけだ。

「よし、飯でも食つか」

「じゃあ食堂でも行くか？」

「そうだね。あまり物もらえるかもしれないし」

弁当わけてやるからそういうことを言つたな明久。

「あ、あの」

おずおずとこつた感じで声が聞こえる。

「お弁当、作つて来たんですけど・・・」

死神の声が聞こえる。姫路、お前が持つてゐるのは凶器か?

「姫路、本当に作つてきたのか?」

「ありがとう姫路さん。さつ、屋上に行こひー。」

明久が意氣揚々と屋上に向かう。弁当、作つてきてよかつたなあ。AEDがあつたら借りて行こひ。

俺は明久たちの命の安全を心配しつつ、屋上へと向かった。

・・・・・そして今、俺の田の前には地獄絵図が広がつて
いる。まさか秀吉やムツツリーーもくたばるとは。

「吉井くんたちどうしたんでしょう」

「食い過ぎだよ。男はよくある」

「そうなの? でもウチの分まで食べなくても・・・」

「島田は俺のを食え。あつでもその前に飲み物頼んでいいか?」

「いいわよ。なにがいい」

「なんでもいい。姫路も頼む。明久たちの分をな」

「はい!」

姫路と島田が屋上から出る。よしつ、邪魔者はいなくなつた。

「えじやせつそく」

俺はAEDを手に取る。まずは雄一だ。」については脈がない。

「戻つて」——「——」

電気ショックを一度当てる。

「ん？」——「は・・・」

なんといつ生命力。もつ戻つてきたか。

「雄一、平氣か？」

「ああ。ところで健吾、姫路のあれば素か？
俺たちに恨みを持っているんじゃないかな？」

あの殺人料理が「冗談だつたらよかつたのに」。

「あれば本氣だよ

「そ、そつか」

俺の遠い目に氣づいたのか、雄一はなにも言わず俯く。この苦しみは一度経験しないとわからない。雄一、俺たちは同士だ。
そこで氣絶している奴らも。つて、そろそろ起きたほうがいいかな。

「雄一、手伝ってくれ」
「おつ」

雄一と一緒に残りを起こす。ここつらめじつとか氣絶していただけのようだから簡単に目を覚ました。

「む？ 僕はいっさい」

「ひどい田にあつたのじゃ」

「…………死ぬかと思つた」

ビリヤー三人に後遺症はないよつだ。

「健吾、姫路さんたちは？」

「飲み物を買いに行つてゐる。お前ひさしひれを食え」

「こんな」ともあひつかと用意していたおじきつを渡す。まあはつきり言つと俺の非常食だつたが、ここひのせつが必要だろ。

「わーい。ありがとう。おいしいー」

「うむ。なかなかけるのう」

「…………なつかしい味がする」

「お袋の味つてやつだな」

ただ白米を握つただけだがな。なんだかここまで言われると照れる。

「あつ！ ちよと、ウチらがいない間にー！」

「皆さん、ジユースです」

島田と姫路が帰つてくる。姫路の手に缶しかないのを見ると、もうあの兵器は持つてないだろ。

「うして波乱の昼休みは終わつた。ちなみに俺の弁当を食べた

島田と姫路が

「もつと頑張らなくひや」

と言つていたのは聞かなかつた」とこいつておいつ。島田はまだしも、姫路に頑張られると死亡者が増える。

姫路と弁当と殺人未遂（後書き）

はい、てなわけでなかなかAクラス編に行けない
一気にぱぱっとアイデアが欲しいものです

俺とカバンと壊された日常（前書き）

二重の意味で

昨日はたくさんあそびました。

てなわけで次話と――

俺とカバンと壊された日常

人通りの多い廊下と焦つたよのな毒。

今は試験召喚戦争の真っ最中だ。当然、相手はBクラス。てなわけで俺も戦闘に出ている。

「健吾！ そつちに行つたよ」

「もう。試験召喚上

明久の合図で召喚獣を出す。 フィールドには

になんとか腹がたつ。

卷之三

「ちよつとあんな小さい子と戯うの？」

相手は女。 それならこっちのものだ。

「JR、JRのんね」

女が攻撃を仕掛ける。その攻撃をよけずダメージがすくないところに当たるようにする。まあ、大分点差はあるから、どこに当たってもたいしたことにはならないだろうけど。

「え！？」 「痛い！」

召喚獣に攻撃をしたはずなのに痛がる俺に
相手は動搖する。

「痛いよう。僕、観察処分者だから、ダメージが涙目で相手を見る。ちなみにこの涙はあぐびだ。うずくまる俺に相手は攻撃をとめる

「そ、そうなの？」

「うん。痛い、痛いよお」

「うー、ごめんね。大丈夫？」

「うん。平気。お姉ちゃんも謝らないで。これは戦争なんでしょう？」

僕我慢するから

立ち上がり笑顔を向ける。相手は辛い顔をして俺を見た。

「じゃ、じゃあ、」ごめんね

「ひい」

俺の召喚獣にまた攻撃がきそつてなる。そこで俺はとつそこしゃがみこんだ。

「あつ……」

相手の召喚獣の動きが鈍くなる。

その隙を待っていた。

「えつ」

俺の召喚獣が鉛筆を振り下ろす。芯の部分が相手の召喚獣に刺さると、相手の点数は0になる。

「わーい！ 勝てた勝てたー」

わざとらしく、ぴょんぴょんはねる。「うし」と疑問を持たれて終わりだからな。まあ、敵は倒しまくってるけど。

「よかつたね。じゃあね」

鉄人に連れていかれるその後ろ姿を見守る。心理戦も一つの戦法だから勘弁してくれよ。

「健吾、明久。ちょっとよいか？」

秀吉に呼ばれ、一時休戦。といつても俺のところにはもう敵は来ないみてえだし別に支障はない。

「で、どうした」

「Bクラス代表、根本のことじやが……」

どうやら秀吉のはなしだとBクラス代表の根本 恭一は、性格の悪さに評判があるらしい。

勝つためならどんな卑怯な手も使うそうだ。

「雄二が心配だ。戻つてみるか」

教室に雄二一人を残すのは危険かもしれない。まあ、あいつのことだしたいしたことはないだろうけど用心にこしたことはないだろ？俺たちは急いで教室へと向かった。

「なんだよこれ」

「ひどい

「やられたのう」

教室に戻った俺たちを待っていたのは、無残なぢやぶ台と、ボロボロになつた筆記用具だつた。雄一が留守にしている間にこんなことを なんてやつだ根本。

「ところで雄一はどうして留守にしていたのじや？」

「向こうから協定の申し出があつてな。調印に行つていた

「協定？」

「ああ。今日の四時までに決着がつかない場合は明日へ持ち越し。その間の戦争に関する行為は一切禁止するつて内容だ」

そんな俺たちの得しかないような協定をなぜ?しかもいつもやつて簡単に点数の回復をさせないようにするつてことは明日に持ち越すつてことだ。そうすれば俺たちのほうが有利になる。ところが、根本のやつなにか作戦が ?

「うわっ、健吾。見てこれ

明久が俺のカバンを指差す。

「!？」

そこにはボロボロになつた俺の筆記用具。

そしてボロボロのカバン。その代わり程度に置かれたランドセル。

野郎

「「いや修復不可能だな」

雄一もそれを眺めながら言つ。

えつ、修復不可能？そ、それって

「やばい」

「へ？」

俺のつぶやきに明久が反応する。

「どうしたの健吾。他のものは無事なのに

「ああ。他のものはな。問題はそれじゃねえよ」

「？」

そう。問題はなにが残ったかではなく、なにが壊されたか、だ。

やばい。むじりこれは大問題だ。

「け、健吾」

「あーあ。明日からお先真つ暗じやねえか。根本の野郎。絶対に一

叩き潰す。

俺の平穏を壊した代償。きつちつと払つてもうりつぱい。

根本くん。

俺とカバンと壊された日常（後書き）

今、ハロウィンにむけて短編を制作中です。

でもそのためにはAクラス戦を終わらせるなくしては

あともうすぐだ！頑張れ俺！！

姫路と根本と奪われた手紙（前書き）

唐笠さん、感想ありがとうございます

それでは、いきまーす

姫路と根本と奪われた手紙

教室の片付けには思つた以上に時間がかかった。被害を受けたのは、主に俺と姫路。まあ主戦力だからな。俺たちは。それでも、俺のカバンを使えなくなるくらいまでボロボロにするのはひどいと思うぞ。これじゃあ治せねえじゃねえか！姫路にはシャーペン折るくらいしかしてなかつたくせに。なんだ！嫉妬か！？とまあ俺たちが片付けていた間に、四時になり、俺たちの戦いは明日に持ち越された。

・・・・・はずだつた。

なにやらおかしな行動をしているCクラスに条約交渉を行つたことで事態は一変する。

Cクラスの代表が根本の野郎と手を組んでいたのは誤算だつた。あつといつ間に協定は破綻。戦争は続行。どうにか一日を切り抜けはしたが、その代償は大きいものに思える。

「静かにしなさい！豚ども！」

まあ、今その分の作戦を実行しているわけだが。

秀吉が姉を真似てCクラスを挑発し、Fクラスに意識をそらす。つてか、秀吉の姉さんはこんなに怖いもんなのか？

このような雄二の機転で戦死者こそ少なくて済んだが、一つ、気になることがある。

それは姫路だ。

一夜明けた今日、なんだか様子がおかしい。疲れているというよりは戦いに身が入っていない。なにか他のことに意識がいっついるように見える。

「戦死者は補習ー！」

また一人、補習室送りにする。こいつらも根本の手駒。そんなやつらに容赦もなにもない。

ん？

「どうしたの健吾？」

ふと見たことのあるシルエットが田のはしに映る。姫路だ。なにか

根本と話している。

あれ
・
・
・
・
・
・
・

明久も気づいたようだ。あれは姫路が明久を誘つた焼肉のチケット。
昨日教室を荒らしたときに盗んだんだろう。まさかあいつ、これが
目的で !

「おい、明久。行くぞ！」

「待つて！」

明久が小声で俺を止める。

「どうしたんだよ」「僕たちは今出ていけない。出て行っちゃいけないよ」

「なんてたよ」

「姫路さんを傷つける」と「なる」

「は
?」

明久が嘘をついているようには見えない。

もしかしたらあのチケットは姫路の大切なもので明久以外には知られたくないのかもしない。

そんなものを盗み、根本はそれをネタに脅してゐるわけだ。つくづく神経が腐つてゐるな。

「わかつたよ

「健吾」

「多分今同じ」と考えてんだろ？ なら行こうぜ

「うん。でも待つて」

明久がゆっくり、遠くから姫路を呼ぶ。いかにも姫路がいたのだけを気づいて声をかけた風だ。

「吉井くん！？」

「姫路さん、朝から体調よくなさそうだし、僕と健吾に任せて休んでて」

「でも」

「いいから。俺の学力はお前並だぞ。なめんな

「は、はい」

姫路がかけていく。根本は逃げたようだ。

根本。俺の動きも止めなかつたこと、後悔させてやる。今の俺は、機嫌が悪いからな。

根本は絶対に俺たちが

「「ぶつ壊す」」

「で、なんだ？ 一人して。脱走ならチヨキでしばぐや」

開口一番、おつかないことを言われる。俺たちが話しているのは我らが代表の雄二だ。

別に脱走目的ではない。

「姫路さんに戦争に参加させないで欲しい」

「はあ？」

意味がわからないのも無理はない。姫路が戦争に参加しないこと自体、負けにいくようなものだからな。

雄二は最初、冗談でも聞いているような顔をしていたが、真剣な俺たちを見て、すぐに真面目になる。こういう察しのいいところはこいつの長所だな。

「別にいいが 。その代わり姫路の仕事をお前らでやれ」

「失敗したら ？」

「言わなくちゃわからねえか？」

雄二が威圧感たっぷりで俺たちを見る。それくらい、失敗は許されないのだろう。

「根本に攻撃を仕掛ける。できるな？」

「任せろ！ ！」

意気揚々と教室を出る。もしこれで俺たちが負けたら姫路は自分を責めるに違いない。そんな後味の悪いこと、させつかよ！

「本当にいいんですね？」

「はい。健吾には兄としての威厳を見せなきゃいけないですから」

「俺の理由は言わないでおきたいです」

ただの殺意だし。

「いいでしょ。許可します」

「試験召喚」

俺と明久の召喚獣が現れる。これはケンカではなくれつきとした作戦だ。

「よし、いくぞ明久！ 「急成長」」

俺の掛け声で召喚獣がでかくなる。これが俺の腕輪の能力。自分の召喚獣を成長させて戦う。一回で消費点数は二百点。まあその分効果は長いし、本物の小学生サイズまでにはなるからかなりでかい。でもなんで小学生サイズなんだろうか。

「か、可愛いいい」

教師が俺の召喚獣を見る。こいつは俺がこの前職員室に連れていかれた時、人一倍俺に興味を持っていたやつだ。これならどうにか気を引ける。

「おらあああああ

すぐ近くでドスンと音がなる。明久の召喚獣が壁を壊す音だ。しかし教師はそんなものには気づかない。というか俺の召喚獣しか見てない。なんか身の危険が・・・

「ドスン！ ドスン！」

明久の召喚獣が壁を壊すたび、明久の拳からは血が流れる。

「ドスツ、ドスツー

明久の額に冷や汗が滲み、足元もフラフラとし始めた。

「一旦戻るぞ」

「なんだ？ 逃げるのか」

雄一からの合図が聞こえる。しかし明久は徐々に力が弱くなっている。

「おい、明久？」

「…………」

返事がない。恐らく全てがギリギリの状態なんだろう。

「ガスツー

「くつ？」

俺の拳を壁に叩きつける。もちろん召喚獣は使えないから素手で。でもおかげで明久も正気にもどつたようだ。

「健…………吾？」

「いいから、召喚獣を動かせ。俺の力がじゃあ対して力になれないからな」

壁に当たった俺の拳から出た血が、下のほうに流れていく。

「わかった。うおりやああああ

「バコン！」

大きな音とともに壁が崩れ去る。根元はそんな俺たちを見て、目を丸くしていた。

「おっす、性格の悪い外道野郎」

「それではとりあえず」

「「くたばれ！ 根本 恭一いい！」」

「・・・・・たくつ、遅えんだよ。バカ一人」

・・・・・「うして俺たちの対Bクラスの戦争は、Fクラスの勝利として終わった。

姫路と根本と奪われた手紙（後書き） (あくまき)

こやせや、やつと終わったよ根本編。

今までには△クラス編に行きたいんだけどなあ。

いけるかなあ

俺といふて本への復讐（前書き）

—おじいちゃん

てなわけで早速始まりです

根本を倒した俺たちは、交渉の為Bクラスに残っていた。

「俺からの条件は今からAクラスに言つて試験召喚戦争の準備はできていくと宣言して」。あくまでも宣言だけだぞ。宣戦布告はするな」

「それだけか？」

根本は雄二がもつと要求するもんだと思つていたんだりつ。おずおずと聞いていた。

たくつ、つこわつままでの態度は一体なんだつたんだよ。

「俺からはな

雄二が明久を見る。

「僕からの条件。それはこれを着てもらうことだ！」

明久がどこからか女子の制服を取り出す。別に女装させなくとも制服は手に入るんじゃないかな？

「あとは俺だな。つてもなあ、特にはなあ

「え？ なんで？ だいぶ恨んでると思つてたけど」

「ああ。だけさつき思いつきリストレスは発散したしな

そもそも女装するつてだけで充分な罰ゲームになつてゐる。俺のイララをぶつけるとなると、こいつをボコボコになくなげやいけない。それはそれで問題だう。

「じゃあ壊されたものさ？ 弁償とか」

「…………」「

明久の言葉で気がつく。確かにボ「ボ」はだめだが……。あるじやねえか。てつとり早い復讐が。

「やうだつたなあ。どうすつかなあ

「べ、弁償はするー！」

根本が叫ぶ。なんだよ、学園長にでも言ひつけたか？

「弁償なんてなあ、もう遅いんだよ。いや、お前が今更なにをしようとひでもう遅い。だから…………」「

根本のアホ野郎に視線を向ける。

「お前の女装姿[与]真集でも作りせておひねりつかな

「は？」

「ちゅうどこい。お前がくれたこのカバン。返すよ。女装[与]真だけじゃつまらねえだろ」「

根本が無言で首を降つていて。やうにやまほひつぱうやつてランドセルなんか手に入れたんだらつ。

「そ、それだけは勘弁してくれー！」

「いいのかあ？ 断わって。全ての条件をえ飲めば、教室は取り替えないのに」「

「これは雄一の策略だ。田指すはAクラス。他の組は手駒くらにこし

か思つてないらしい。

「まかせろ！ 僕たちが絶対にやるせる。」

「おう、強制だ！」

他の奴らが声をあげる。Bクラスのやつらはこいやつばかりだなあ。代表は修復不可なくひびて腐つてゐるけど。

「じゃあ、よろしく」

雄一について教室から出て行く。

「あれ、見ないのか？」

「誰が見るか、んな気持ち悪いもん」

俺たちの声がピッタリ重なる。そんなもの見たら夢に出でつつの。

「その代わり、優秀なカメラマンを置いていくからな

「……不本意」

ムツツリー二が不機嫌そうにカメラマンを持つてゐる。こんな姿始めて見たかもしれない。いつもなら撮る気満々なのに。

「んじゃ、よろしくな」

「ムツツリー二も頼んだぞ」

「可愛くしてあげてね」

「それは無理。土台が腐つてゐるから」

去り際、そんな声が聞こえた気がした。根本、本当に人望はあつたのかなあ……。

交渉後、教室に戻る。そして扉を開ける。

「遅かつたじゃない健吾。お密さんがー」

ースパンツー

勢いよく扉を閉める。今見たことは忘れよう。うふ、そうしよう。

「け、健吾。今教室にものすごいにかつこいい人が……」「なに言つてるんだ明久。そんなやつEクラスにいるもんか。あー、俺先に帰るな」

そう言つて本氣で走る。

「待て、カバンはどうした」

雄二に捕まえられた。

「い、いや。ボロボロだつたし」

「じゃあ教科書は」

「明日でいいかなと」

「お前、なんか怪しいな。明久、せつせつ扉を開ける」

「うん」

「あつ、ちよつ！」

明久が軽快に扉を開ける。ま、まずは顔を隠して……それ
で……

「健吾おー」

なんだかでかいのが飛び掛かってくる。雄一につかまれているから、逃げようにも逃げられない。

「健吾…………？ 知り合いの人？」

明久の苦笑いが妙に悲しい。

「違う。変質者じゃないか？」

「健吾！ 兄になんてことを言つのです！」

「いらぬ」とを言つなあああああ……

「えつ、お兄さんなの？」

「ま、まあな。つて」と迎えがきたから帰るな！ みんなまた明日…！ 行くよ爽兄。」

カバンを持つて急いで立ち去る。これ以上爽兄がここにいたら色々と危うい。急いで連れて帰らなくては。

「け、健吾。ちょっと待つて下さい！ 僕はこのクラスの方々にお話が…」

「それは今度な。今は忙しいんだよ」

急いで爽兄を引っ張つていく。

「おい健吾。別に今は暇だから平氣だぞ」

雄一が笑みを浮かべながら俺を見る。「の野郎、おもしろいとか考えてるな。

「では、そうしましょ。僕は神田 爽吾と申します。健吾の兄です」

「吉井 明久です」

「坂本 雄一です」

「……土屋 康太」

「木下 秀吉じゃ。これでも男じゃぞ」

「姫路 瑞希です」

「島田 美波です」

いつのまにか教室にいた爽兄の挨拶に合わせて、他の奴らも挨拶をする。

にしても姫路たちはすげえな。俺から見ても爽兄はかっこいい。爽兄と話す時の女子たちは目をみんなハートにするのに。もしかしてこの二人……。

男じゃなくて女が好きとか？

「美波ちゃん、なんだか変な勘違いをされている気がします」

「偶然ね。ウチもよ」

なにか姫路たちが小声で言っていた。

「健吾、健吾のお兄さんたちの制服着てるよね？ ここの学生だつたの？」

「いえ、違います。転校してきたんです」

やつぱりか。

「ここの時期に転校ですか？」

「どうしてじや？」

「健吾が心配だつたからです」

「心配？」

「健吾はこんな外見ですから、いじめられないか心配で……。なのに一人暮らしなんて……」

ん？」この流れつてもしかして悪いの俺になつてる？

「で、発信機が壊れたので約束通り転校してきたわけです」

「「「発信機！？」」」

「びつじてこいつ、すぐペラペラ話すんだろうか。

「はい。カバンに筆箱に……健吾の持ち物全てにつけてあります」

笑顔で言う爽兄を見てみんなの視線は俺に向けられる。

「い、言つとくけど、俺は嫌だつたんだからな。ただそれが外れたことが分かれば爽兄が転校していくつて言うから……」

それだけは嫌だつたのに根本の野郎！！

「てことは三年生ですか？ もしかしてAクラス？」

明久がそんなことを言つ。まあ兄つて言われてあんな顔してりやあ そもそも思えるけど。

「いえ、一年Fクラス。」」」

「「「ええええええ！？」」」」

それが爽兄の実力です。

「えつ、双子とか？」

「いえ、一歳上ですよ」

「じゃあわざと？」

「いえ、実際三年生にはいるはずでした」

「ならなんで？」

「転校前の学校からもう一度二年生にと、連絡がきたらしくて」

そう、爽兄は頭が悪い。もしかしたら明久も勝てるんじゃないかな？

「と、いうことですので、これからよろしくお願ひします。どうぞ爽吾とお呼びください」

こうして力にならないやつが一人増えた。といつかこれで平氣なのかな？対Aクラス。

俺といちごと姫本への復書（後書き）

ノロノロじてこぬつむこもつすぐハロウインも終わってしまつ……。

△クラス編急いで終わらせよつてことで更新です

一日に何個も更新したいけどできない

ああ、自分の容量の悪さが限めしい

人物紹介2 & バカテスト2（前書き）

新キャラの紹介です

人物紹介2 & バカテスト2

神田 爽吾（18）

健吾の兄。めちゃくちゃ美形。のくせにめちゃくちゃバカ。

健吾が大好きないわゆるブラコン

召喚獣は武器を持つていらない丸腰状態

腕輪の能力は一生でないんじやないですかねww

得意な教科 音楽
苦手な教科 数学

「バカテスト」

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

「光は波であつて（ ）である」

姫路 瑞樹の答え

「粒子」

教師のコメント

「よくできました」

榎田 爽吾の答え

「真秘的」

教師のコメント

「非常に素直でいいと思いますが、
「真秘的」ではなく「神秘的」です」

卷之三

「歴者の武器」

教師のコメント

「先生もRPGは好きですか？」

坂本
雄一

いけ！」

土屋 康太の答え

必殺奧義！

榎田 健吾の答え

「サンダートルネードオオオ！！！」

教師のコメント

「しかし攻撃は外れた」

坂本・土屋・榎田のコメント

教師のコメント

「テストで遊ばないでください」

～テスト返却後の感想～

瑞樹「みなさん、ゲームにはまっているんですか？」

明久「うん。ちょっとRPGにね」

雄二「明久に借りたんだが、俺たちがはまっちゃってな」

康太「……おかげで寝不足」

爽吾「そう言えば健吾もやってましたね」

健吾「おもしろいよ。今度やってみる」

爽吾「いえ、昨日少し借りたので平氣です」

健吾「えつ……？」

爽吾「安心してください。ちゃんとセーブもしましたよ」

健吾「えつ……。ち、ちょっと先に帰る」

爽吾「なんですかね？ あんなに焦って」

明久「そういうえばあのゲーム。セーブできる場所が一つだよね」

雄二・康太「健吾……」

人物紹介2 & バカテスト2（後書き）

今見直すと、健吾も爽吾もややこしいですね。

気づくのが遅かったorz

バカと俺たちと下剋上！？

とうとうAクラスとの戦いがやつてきた。

代表戦で多く勝つたほうが勝ちという簡単なルールだ。まあこれら俺たちにも多少有利な点はある。

それにしても、あの霧島 翔子と雄一が幼馴染とはな。それに驚いたが、その後のクラスの奴らのほうが驚いた。まさか容赦なく雄一を殺しにかかるとは。本当に怖いクラスだ。

「健吾。なにをぼつとしているんですか？」

「えっ！？ いやなんでも」

「ほり、秀吉くんですよ」

第一回は木下姉VS秀吉。成績に差はあっても、双子だからこそ知っている弱点があるはずだ。それを使えば……。

「つて、あれ？」

表示された点数？ を見る。

「生命活動 木下 優子 WIN

木下 秀吉 DEAD」

「秀吉いいいい」

健闘する姿も見られないまま、秀吉は星になつていた。

「代わりに出る方は

「僕が出来ます」

「爽兄！？」

隣で爽兄が手をあげていた。

「僕らのクラスの勝利のためです。戦いましょう」

爽兄が戦わないことが俺たちの勝利につながるんだけど……。つてそんなこと思つてる場合じゃない。早く止めないと……

「爽兄！ いいから！ 頼むからでないで！」

「健吾、平氣です。僕だつて勉強してきたんです」

「じゃあ、召喚してみてよ。雄一たちに決めてもらおう」
「望むところです。試験召喚」サモン

幾何学模様が表示され、出てきたのは——

「数学 椎田 爽吾 11点」

「一桁取れたんですね」

丸腰の爽兄の召喚獣と、自身満々の爽兄。そして想像を絶する点数
だった。

「どうしよう。僕の方が高いよこれ」

「点数悪すぎると、武器すら持てないんだな」

「すまん……」

謝ることしかできない。

「どうですか」

「すみません。ここは爽吾さんより健吾に出でもひつたほうが……

・・・

「そうですか」

爽兄は分かりやすくへこんでいる。

「というわけで俺がいきます」

一步前へ出る。いくら俺も点数が高いとはいえ、相手はAクラス。氣を引き締めないとな。

「か、かわ・・・・・・」

「？」

「なんでもないわ。始めましょ。試験召喚

〔試験召喚〕

お互いの召喚獣が出てくる。といひでわつわいこいつはなんて言ったんだ？かわ・・・・・・皮？

〔数学〕 木下 優子 362点

〔数学〕 神田 健吾 400点

爽兄が来て回復ができなかつたから、こんなもんかな。

「なかなかね。あなた、本当にFクラス？」

「まあな」

「まあいいわ。こちから行くわよー。」

木下姉の攻撃が俺の召喚獣に当たる。それを避けたあと、不意打ちで一発食らわせる。

「まだまだ！ これに勝てば…………。弟がもう一人…………。」

なんだか木下姉のつぶやつた言葉に寒気を覚える。弟がもう一人つて…………なに？ 僕、負けたらなにされるの！？

「まだ死ぬ訳にはいかねえええ！！」

快心の一撃を召喚獣に食らわせる。大幅に点数を削ったあとでラストの一撃。

「木下 優子 0点」

まあ、こんなもんだろ。それにしても木下姉は妙に俺をなごりおしそうに見ていた気がしたが…………氣のせいということにしておけ。

俺の勝利で、Fクラスは勝ち星をあげたものの、次の明久により、同点となる。あんな瞬殺、描写するまでもない。

次はムツツリー二の番、これは当然勝ち。同じように保健が得意な奴が敵だったのにはひやひやしたが、まさか腕輪を使うとは。そして今は姫路のわけだが…………。

「いきます。 試験召喚」

何故か爽兄が出ている。というのも、始まる前、姫路が突然倒れ、急遽爽兄が出ることになった。相手は学年次席の久保 利光。当然、爽兄に勝てる要素はない。

「なにか科目の指定はありますか？」

「そりですね。僕は向こうの方に合わせます。歳上です」

久保は恐らしく負ける気はない。俺もそりだと思つ。

「では、家庭科にしましょう。得意科目ですし
「は？」

俺の口からは間抜けな声が出てしまう。今爽兄なんて言つた？ 家庭科が得意科目？

「そ、爽兄…………？」

俺が言うと爽兄はまかせろ！ といった感じの笑みを向ける。

「そ、爽兄！ 今すぐ科目を――」

「「試験召喚」」

二人が同時に召喚する。もうダメだ。爽兄は自分が思つてはいるよりも遙かに家庭科は苦手なんだから。

「家庭科 久保 利光 250点

あれ？ 久保も意外と点が低い。久保、焦つてはるな。家庭科は苦手なのか。

「神田 爽吾 30点」

爽兄もほうが遙かに下だけど。あつ、久保驚いてる。あいつもあんな顔するんだな。

「あ、ちょ、健吾？ 爽吾さんは家庭科得意なんじゃ……」

「自称だよ。本当はめちやくめちやだめ」

「腕前は？」

「姫路くらい」

「「「それは……」「」「」「」

みんながうつむいていた。島田は姫路の看病でいないし。今この場にいるやつらは同じ苦しみをしるやつらだ。

「で、でも、点はいいんだね」

「まあ、家庭科は好きらしいからな。裁縫ならできる」

「なるほど、実技（料理）以外は問題ないわけだ」

雄一の察しが良くて助かる。とか話している間に爽兄は負けて帰つてきた。瞬殺か。

「すいません」

「気にしないでください。俺が勝てばいいんすから」

「本当に勝てるの？」

「おう！」

雄一のこの言葉は、強がりではないようだ。さて、次は霧島と雄一の一騎打ち。頼んだぞ雄一！ ！

小学生レベルの問題。こんなのは霧島にとって簡単なこと。でも一問、あの問題をえ出れば逆転はできる。

「坂本くんには悪い」としました。私が倒れたりしなければ……

「……」

『気づくと姫路が立っていた。気づいたら眞理は良くなつたらしい。

「平氣だよ姫路さん。あの問題をえでれば」

「そりですよね。坂本くん、がんばつてください」

どんどんと問題が表示されていく。霧島はその問題を顔色も変えず
に平然と解いていく。これでは満点をとつてしまつかもしれない。

「あつ！」

「どうした？」

明久の視線の先をその場にいた全員が確認する。そこには大きなモ
ニターに

【（ ）年 大化の改心】

「「あたあああああ！」」

「やりました！ やりましたよ美波ちゃん」

「やつたわね。瑞樹」

「これで・・・」

「「「「Fクラスの勝利！」」」

全員が歓喜でわいた。と思っていたら一人だけそうなつていなか
つがいた。

「どうしたの爽兄」

爽兄は難しい顔をしままモニターを見ている。

「はたして本当に勝つことはできるのでしょうか？」

「大化の改心の問題はでたし、いけると思うよ」

「いえ。確かにそうです。そこで霧島さんは点を落とすかもしだま

せん」

「うん」

「でも、坂本くんは満点を取れるのでしょうか」

「え ?」

「雄一が満点を取れない? これは小学校の問題。取れないわけが . . . 。

「明久、お前何問解けた」

「うーん。12問くらいかな」

「島田は?」

「15問ね」

「姫路は?」

「90問は解けました」

「ムツツリーは?」

「 30問程度」

さつと血の気が引く。爽兄が何問解けたかなんて大体予想はつく。俺たちは重要な勘違いをしていたのかもしない。いくら神童と言われていたつて、それは昔の話。たしかに今満点が取れるとは考えにくい。

「やめつ。 結果発表です」

モニターに全員の視線があつまる。

「Aクラス 霧島 翔子 97点」

VS

「Fクラス 坂本 雄一 53点」

みんなの机がみかん箱になつた。

バカと俺たちと下剋上！？（後書き）

どうにかAクラス戦終わつたあああ！

途中から焦りからか無理やりになつてしまい謝ります。

すいません

でも次はちゃんとしますよ！

ちなみに次あたりでこの章もおわり新章に

突入です！

バカなクラスの後日談（前書き）

今回は少々短いです。

バカなクラスの後日談

「さて。明久。こいつはどう処分する
「そうだね。ここは 」
「「潰れろおおおーー！」」

雄一は強いがいくつも机を落とせばくたばるはずだ。

「なんだよあの点数！ 自信ありげだつたじゃねえか！
「それに関しては言い訳もできない」
「期待させといで！ ここのバカ雄一！」

机を持ち上げ雄一に目標を定める。

「 . . . 雄一」

放り投げようと力をこめた腕をすぐ下ろす。霧島に当たつたら大惨事だ。

「約束。命令を一つ聞いて
「なんだよ
「わたしと付き合つて
「お前、まだ諦めてなかつたのか

一瞬わけがわからなくなる。これは告白つてやつか？ 霧島が雄一を
？ 幼なじみでそんなのどこのラブコメだよー

「わたしはずつと雄一のことが好き」
「はあ」

なんだ？ ここの小つ恥ずかしい展開は？ というか、なんでみんなあんな平然としているんだよ！

「霧島さん、積極的ね」

「見習いたいです」

女子なんか、尊敬の眼差しで見てるし。明久たちは普通に見てるし。ああ、なんだ？ 僕がおかしいのか？

「諦める」

「嫌だ。早速明日デートに行く」

「デ、デートって……。もうだめだ。この空氣耐えきれん。

「かか帰らせていただきます

「健吾どうしたの！？ 顔真っ赤」

「きき気にすんな。じゃあな」

「すいません。健吾が恋愛的な空氣が苦手なの忘れてました。僕も失礼します」

急いで外へ飛び出す。ああ、恥ずかしい。告白なんて人の目の前でするなよ。

あのクラスでこれからもやつてくんだよな。女子少ないから問題ないと思うけど。

なんか不安になってきた。

バカなクラスの後日談（後書き）

次回からは新章突入！

．．．．．の予定です

バカテスト3（前書き）

バカテストはじまりはじまりー

バカテスト3

学園祭で出し物を決めるアンケートに答えたさい

「あなたが一番欲しいものはなんですか？」

姫路 瑞希の答え

「みんなとの思い出」

教師のコメント

「みんなとの思い出になるような出し物
もいいかもしませんね」

神田 爽吾の答え

「クラスのみなさんと打ち解ける場」

教師のコメント

「途中からの転校でみんなより年上ですから、そういう時間も必要ですね」

吉井 明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

「INの解答に君の生命の危機が感じられます」

榎田 健吾の答え

「背が伸びる薬」

教師のコメント

「」の解答からあなたの悲しみが伝わってきました

・・・テスト返却後の感想・・・

明久「この文化祭でみんなと仲良くなれるといいですね、爽吾さん」

瑞希「そうですね」

爽吾「はい。ありがとうございます」

健吾「・・・・・」

明久「健吾、なに泣いてるの？」

健吾「お前には分からねえよバカ」

バカテスト3（後書き）

次回から新章突入です

バカと春と文化祭（前書き）

文化祭編突入です！

それでははじまりです

バカと春と文化祭

まだ暖かな春の陽気。それもそのはず、今はまだ一学期。試験の喚戦争を終えた俺たちは、少しの平穏な日々を送っていた。が、今はまったく平穏とは言えない。

「で、クラスの出し物なにするんだ？」

黒板の前に立つて、クラスのやつらを見る。うん、ろくないくんが出なもんつだ。

「 [写真館]

「コスプレ喫茶！」

「姫路さん喫茶！」

「いや、こには健ちゃん喫茶だろ」

「待て！ 秀吉喫茶も捨てがたい」

早速収集がつかなくなっている。お前らに期待はしてなかつたけどな。

俺たちは今、来る文化祭の話し合いの最中だ。一学期に文化祭といつのばじうにも府に落ちん。どうせだつたら夏休み明けとかにしてくれよな。

「明久、書けてるか？」

明久が書記なんものができるかなんて期待すらしていないが、いちおう確認で黒板を見る。

「コスプレ[写真]喫茶（秀吉・姫路さん・健吾）」

「はん？」

確かに明久の頭で全員の意見がまとまるなんて思つていなかつた。
だが、普通意見をまとめるか？ ていうかコスプレ写真喫茶つてど
んなのだよ！

「明久の頭が追いつかない！ 一人ずつ意見を言ってくれ」「健た」「しゃ」「コ」
「…」
「喫茶！」

わつわよつもひどくなつたな。

「明久、今のは書かなくていいぞ」

えり、 そ う な の ？

黒板をまた見る。

「健吾＝ス＝レ＝レクシ＝ン喫茶」
・・・・・ 気がついたら俺限定になつていていた。

「静かにしろって！ おい！」

騒ぎは収まらない。このままじゃ俺は「スプレー写真が流出する」という一大事になってしまつ。くそつ、奥の手だ！

「うう。僕の話し聞いてよ。ひく。うえ」

あえて見えるように教卓の横で座り込む。ちなみに涙は目薬だ。秘技！ 瞬間目薬さし！

「『めんね健吾。 静かにするから。 ね？泣き止んで？』」

「ほんと？」

「本当よ。 ね？」

島田の鋭い目がクラス中に向けられる。一瞬でクラスが静かになつた。

「あつ、いいこと考えましたよ」

「爽悟さん？」

「兄弟喫茶でいいじゃないですか。健吾もお役に立てますし」

爽兄のバカ！！ なにを言つてくれちゃつてるんだーーって

「兄弟喫茶」

明久も書かんでいいーー！！

「それじゃあ多数決で決めるわよ。兄弟喫茶がいい人ーー」

クラスも連中は今回で一番の団結力を見せていた。

バカと春と文化祭（後書き）

いろんな都合上により文化祭が早い設定です。
といつかすでに原作無視状態ww

兄と弟と役割分担（前書き）

では始まりでーす

兄と弟と役割分担

「あとは役割分担か。キッチンとホールでいいよな」

渋々、進行を進める。

「…………キッチンは俺にまかせろ」

「お前、料理できるのか？」

「紳士の嗜み」

何時の間にか目の前に立っていたムツツリー二が言う。紳士って……。お前、行動がすでに紳士じやないんだけど。

「お料理でしたらわたしもお手伝いを——」

「「「いや、いい！」」」

姫路、なんてことを言い始めるんだ。俺たちは胃が特殊だから平気だが、凡人は食つたら即死だぞ。

「でも兄弟喫茶ですからわたしたちは……」

なんという凡ミス！ 兄弟、とついている時点で店員は男のみ。ぐああ、なぜ気づかなかつた。

「簡単なことです。お一人とも姉か妹になればいいのですよ

「「？」」

爽兄の言葉に一人は？マークを浮かべる。確かに兄弟に限らず姉妹にはできる。そうすれば被害者はいなくなるな。

「そ、それがいいよ姫路さん！ お姉さんとかいいかもね」「そ、ですか？ それじゃあ……」

姫路がその気になつてゐる。ナイスだ明久！

「ア、アキ！ ウチは…………？」

「美波もお姉さんかな？」

「そ、そう？ がんばりましょ、瑞希」「は、はい」

二人がやる気になつてゐる。心変わりが早いなあ。もしかしてどちらやりたかったんじゃないのか？

「明久、それだと妹もいないとおかしくないか？」

「平気だよ。秀吉がいるじゃないか」

「明久！？ それはおかしくないかのう！」

「ああ。平気だな」

「健吾まで！！」

秀吉なら妹に限らなくとも他也演じられるだろ？

「じゃあ、ホールは明久、姫路、島田、秀吉、爽兄、雄一あたりでいいよな」

「えつ、健吾は？」

「俺はキッチンだよ」

面倒だし。

「そんな！ 健吾はホールだよ！ ねつ、雄一」

「…………ん？ ああ。どうでもいいんじゃないか？」

明久の言葉で、ちやぶ台に突っ伏していた雄一が顔を起こす。あいつはこいつ「行事に興味がないだろ」が、本当にやる気ないんだな。

「健吾、いいんですよ無理しなくて」

「爽兄…………」

爽兄だけが俺の気持ちをわかつてくれてている。さすが俺の兄ちゃん。

「健吾は僕以外の弟になるのが嫌なんですね」

前言撤回。なんかすつごい勘違いされてるし。

「明久、俺、やるよホール」

「本当？ ゆしつ、決定！」

きつと俺が折れないと更にややこしくなると思つ。まあ姫路たちに客が行って、俺は楽できるだろ。

「姫路、島田、俺、明久、雄一、爽兄、秀吉以外はキッチンその他を頼む」

「オッケー！ 我が弟よ！！」

なんでこいちらはこんなにテンションが高いんだろ？

とりあえず姫路と島田が姉。明久と俺が弟。秀吉がいろいろ。

爽兄と雄一が兄。

で決まつたが、雄一はちゃんとやつてくれんのかな？

ふと爆睡中のクラスメイトを見る。あいつがいるといないじゃあ、クラスの士気も変わつてくるからな。どうにか動かせられたら

兄と弟と役割分担（後書き）

テストが近づいたり、ネットがつながらなく
なつたりで「不幸だーーー！」って叫んでま
した

今はネット繋がりますが、

テストが近いー！

．．．．．はあ、ため息しか出ねえや

バカと転校と丸秘作戦（前書き）

どもども

わざわざはじまりです

バ力と転校と丸秘作戦

役割も決まり、自由時間。
つても特にやることもねえし。暇だ。

「ねえ、健吾、アキ
「ん? どうした?
「なにかあったの?
「

島田が真剣な顔で俺たちに話しかける。

「その…。相談なんだけど」

島田が相談なんて珍しい。

ト どうにか坂本を文化祭に引っ張りだせないかなと

すぐ近くで爆睡している悪友を見る。この手のことはどうとん興味がないからな。こいつ。

「難しいかもな」

「でも、アキと健吾ならできるでしょ？」

「だつて……」

島田が爆睡中の雄一を見る。そして俺と明久を見る。

「アキと坂本がその…………健吾を育てるんでしょ？」

「「は？」」

育てるつて、俺はこいつらと同じ歳だし。
てかどこも情報だよ！ それ。

「島田。俺は無関係だ。任せるなら明久にしてくれ」
「健吾！？」別に僕も雄一となにもないんだけど
「ところで島田、突然そんなことを言い出してどうしたんだよ」
「ちよつ、僕無視？」

明久がなにか言っているが、無視の方向でいこう。

「坂本がいないと文化祭が失敗する気がして」
「別にいいんじゃないか？ それも思い出だし。たいしたことない
だろ」
「それがあるのよ」

島田がうつむく。まさか、文化祭が失敗したらなにか災いがーー。

「美波、どうこうこと？」

「本人には言わないでって言われてるんだけど。内緒よ？」

なんだか深刻な話しらしー。空氣を感じ取った秀吉やムツツローー。
爽兄までやつてきた。

「瑞希が転校しちゃうかもしれないの」

姫路が転校？ 確かにこのクラスの環境は姫路にはよくないが、転
校するほどか？
どんだけ頭の硬い親父だよ。

「なあ、明久はいったいどう思……？」

明久がなにかブツブツ言いながら、虚空を見つめている。
なんだかんだこいつは姫路と仲がいいからな。ショックなんだろ
う。

「ねえ、健吾」

「ん？ どうした」

明久の目が虚空を見つめている。

「僕がモヒカンになつても、弟として接してくれるかい？」
「転校から一体どうすればそこにたどり着けるんだー？」

いかん、明久が壊れ始めている。
たしか斜め45°を叩けば大抵は直るよな。

「つりやつ」

「だつ、」

「明久は電子機器ではないぞい！」

「でも直つたみたいですね」

「……構造が単純」

「反論もできないわ」

明久がきょとんと俺たちを見ている。
「どうやら正氣には戻つたようだ。」

「で、姫路が転校つて、どうしてだよ」

「Fクラスの環境が原因の一つよ。瑞希、体が弱いから」

たしかにこんなボロボロの教室じゃあ、体にいいとは言えない。文化祭で成功すれば、教室のことだつてどうにかできるかもしねいな。

「姫路と競つ粗手もおうながらの。われもあるのじゅるり」

俺だけでは足りないしな。あいつがAクラスにさえいればいいんだが。

「ア、アキは瑞希が転校したら嫌よね？」

「なに言つてゐるの。姫路さんじやなくとも、このクラスの誰がいなくなつてもいやだよ」

「やつよね」

島田がじにかほつとした顔をしてくる。なんだ？ 島田ももしかして転校しそうになつたとか？

「でも雄一くんをじひせつめせよ」

爽兄の言葉で氣がつく。あいつは一回頼んだくらいで協力してくれようがないやつじやない。わて、じつつかな。

「むにゅや ． ． ． ． ． 待て、翔子」

雄一の寝言か。てか、なんで霧島の夢？

「あ、待てつて！ お前、なにする氣だ！ それをしまえ！ うさやああ」

いつたいどんな夢見てるんだ？」「いつは。ただまあ、こいつを動かす作戦は考えついた。

「健吾」

「ああ、言われなくともわかつてゐるよ」

明久と互いに皿配せをする。

どうやら明久と俺の考えは一緒らしい。

「お、おぬしらなにをする気じゃ？」

「ちょっと雄一を動かしにいくんだよ」

「あんたたち、すつごく悪い顔してるんだけど」

「気のせいだよ。さつ、行こうか、健吾」

「ああ。じゃあ、お前たちはここで待機な」

明久と二人で教室を出て行く。

ちょっと助けを頼みに行かないとな。

Aクラスへ。

バカと転校と丸秘作戦（後書き）

確實に原作スルーしてますね

まあきっとすぐに戻るでしょうね

えりやんも

んじやはじまりです

バカと雄一と逃走劇

明久と共にAクラスへ向かう。

理由は簡単。霧島に協力をしてもうつためだ。やつぱ、じつじつ時
霧島は頼りになるよな。

「吉井、なにしてるの？」

「あつ、霧島さん。霧島さんを探してたんだよ」

「わたしを？」

霧島が首をかしげる。まあ俺たちが霧島に用があるなんて大抵はな
いからな。

「実はゆーーー

「わかった。今行く」

「早っ！！」

霧島がすんすんとFクラスへ歩き始める。手にスタンガンみたいな
ものが見えるけど・・・・・・・・・気のせいだよな。うん。

「雄一いる？」

「そこで眠つて・・・・・・。いなくなつてあるのう」

「霧島さんの声を聞いた瞬間、窓から飛び出して行つたわね」

確か雄一、爆睡してたよな。第六感でも働いてんのか？

「雄一、逃がさない」

「あつ、霧島！」

霧島が教室から出て行く。あいつがいんじやあ計画が成り立たねえ。

「明久！ 計画変更だ！」のまま「べ」

「了解！」

教室から出て行く。あいつの「ことだ。行く」なんて思つべ。

「やつほ、雄一」

「やつぱつ、ここにこむと思つたぜ」

「……」

「？ デリしたの雄一」

「なんか言えよ」

「お前ら、じーじがじーじだかわかつてゐるのか？」

「やだなあ」

「当然だろ。じーじせーー」

「「女子更衣室だり（でしょ）？」」

そう、俺たちは今女子更衣室の中こる。当然、雄一も。ちなみに先にこたのは雄一であり、俺たちは雄一を追つてじーじまで来ただけだ。

「普通、じとなどいで鉢合せなんかしないと思ひや」

「雄一はなにを言つてゐるんだ？ 、同じ学校にいるんだから、鉢合わせだつてするだろ。」

「で、雄一。話しがあるんだけど」

「 」でか？」

「別に外出でもいいぞ？」 霧島が追いかけてくるナビ

「こや、 」でしょ、

雄一が話しがわかるやつに助かる。

「あのなーー」

「あんたたち、 」などいりやつしてみのよ

「 えつ？」 「 」

声のすみせつを振り返ると、 秀吉が立っていた。

「秀吉？」

「あんなバカと一緒にしないでくれる？」

「木下さんー？」

秀吉と同じ顔で、 顔がそりへつなやつ・・・・・。

「木下 優子か！」

木下はため息をつく。

「ちょっと先生呼んでくるわ」

「ちよちよちよ木下さんー？」 ちょっと待って

「なんどよ？ 覗き魔でしょ。 あんたたち」

「誤解だよー」

「 」で教師を呼ばれると職員室直行はまぬがれないだらけ。 そういうればまたあの変態教師どもの餌食になるつてことだ。 とつあえずここから脱出できれば、 逃げ切れるー

「ねえ、お姉ちゃん？」

「はうっ！」

あれ、木下の動きが止まつた。案外、ちゅうといつつか、もしかしたら子供好きか？あつ、俺が子供に見えるとかそういうことではないからな。

「落ち着くのよ。優子。気にしちゃだめ気にしちゃ」

木下がなんかしきりに暗示をかけている。よくわからんが、今がチャンスか。

「それじゃあトンズラさせてもらひづせ」

「あつ、ちょつ」

明久と雄一を連れて更衣室から飛び出す。木下は驚いた様子で俺たちを見たが、今更追いつけるはずがない。

「むつ、吉井に坂本に榎田。なにやつてるんだ？」

「「「「「「げつ、鉄人！」」」」

「西村先生！ そいつらは覗き魔です」

「なに！？」

「やべつ、逃げるぞ！ 明久、健吾」

「「おひ」「」

鉄人の反対方向に走る。くそつ、鉄人め。なんで更衣室近くなんか歩くんだよ。

。 あつ。まさか鉄人、覗こつとしてたんじや

「榎田！ なにか勘違いをしてないか？」
「い、いや。まったく」

考え方読めんのかよ。あの化物教師！

「よし、健吾！ 明久！ 行け！」

雄一が窓に向かつて足場をつくる。これを土台に上の階に飛び移れ
つてことだ。

「行くよ雄一」

「おう」

明久が跳ぶ。上方から着地の音が聞こえたから無事に飛び乗れた
んだろう。

「健吾！」

「わかった」

雄一に向かつて走りはじめたその時、

「ふわっ」

急に体が宙にういた気がした。ついでに後ろの方にだれかに掴まれ
ているような違和感。

「やつと捕まえたぞ。榎田」

「健吾！」

くそつ、鉄人に捕まつた。これじゃあ簡単には逃げられねえ。

「雄一、俺は平氣だ。先に行け！」

「わかつた」

雄一が上へ登つて行く。あとは明久がなんとかしてくれるはずだ。今はここから逃げることだけを考えよう。まずは大きく息を吸う。そして——

「助けてー！ 变態教師に攫われるー！」

「神田！ お前なんてことを」

鉄人の手の力が緩む。今のうちに逃げよう。

「あつ、待て！」

「西村先生！ なにやつてるんですか？」

「た、高橋先生？」

「あんな子供を攫おうとするだなんて。お話があります。来てください」

「い、いえ。神田が——」

「黙りなさい！」

鉄人が何人もの先生に連れていかれる。といつか俺は子供じゃあな
いんだが。

まつ、逃げられたんだからよしとするか。
たぶん、明久たちは教室に戻るだろう。ここでだらだら歩くのは
暇だし、先に戻ってるかな。

バカと雄一と逃走劇（後書き）

最近、咳が止まりません。

この前なんて授業中に死にかけました。

きっと風邪じゃない！ だってバカだから！

空気乾燥しますからね。

みなさんも気をつけてください。

俺と明久と姫路への思い（前書き）

はあ、サブタイトルがあまりにもあれだ。
今回は恋愛色が強い！といいなあ

俺と明久と姫路への思い

俺は教室の扉の前で立ち止まっていた。
別に中に入つたら鉄人がいるんじやないかと疑つてゐるからではな
い。ただ――

「 秘蔵、健吾の生写真」

「500円で買うわ！」

「1000円！」

「えーい、10000円だ！」

会話だけで嫌な予感しかしない。

入つていつてもなにも害はないだろう。ただどうにも入りづらい。
というか今、島田も参加してなかつたか？

「健吾？」

声がして振り返ると、明久と雄一がいた。

明久は顔面ボコボコだが、まあ気にしないでおこつ。

「無事だつたんだね。鉄人が健吾を襲つてたつて噂聞いたときは驚
いたよ」

「まさか鉄人にそんな趣味があつたとはな」

どうしよう。鉄人に会つたら謝つたほうがいいかもしれない。

「とにかく、入るぞ。これからのは戦会議をしなくちゃな

どうやら、明久は無事、説得できたらしい。雄一は教室の扉を開け

た。

「 明久の女装写真」

「 10000円！」

「 どうして僕の写真がオークションに出されてるの…？」

すでに対象が変わっていた。

明久、俺とお前は同志だぜ。

「 どうやら無事、坂本くんの説得力終わったようですね」

「 割りと早かったのう。雄一相手ならもつと手こじすると思ったのじ

やが」

奏兄と秀吉が俺たちを見てやつてくる。

「 ああ、明久の大好きな誰かさんのためにな」

「 ちょっと、雄一」

明久が急いで雄一の口を抑える。

「 なるほど。そういうことですか」

奏兄が一人で納得している。秀吉はその隣でうなづいてるし。

ん？ この文化祭は姫路のために頑張るわけで。明久は大好きな誰かのために頑張ると。

これって、単純に考えると――

「 明久って、姫路のことす、もがつ」

明久に口を塞がれる。えつ、冗談半分だったのに。図星か…？

(明久、図星？)

(.)

小声での問いに明久が無言で頷く。

教室出て話したほうがいい氣がするんだが、明久のせいで動けない。

(さっきまで自覚はなかつたんだけど、雄一が間違いないって)

いつたいさっきなにがあつたんだろう。
たぶん俺と別れたあとだよな。

ああ、鉄人に捕まらなければよかつた。こんなおもしろいことを聞き逃すとは。

(俺が言つてやるつか？)

(！いいよ)

(なんで？ どうせお前に言つ勧氣ないだろ)

といつか俺はお前が振られるところをみたい。

(. から)

(ん？)

(そういうことは 僕が言いたいから)

明久の顔が真っ赤だ。

なんつうか、こいつあんまこんな風に照れないからな。鼻血だすことはあつても。ちょっと珍しい。

つて、ああ、俺まで照れてきた。やつぱり無理だこの空氣！

「あのう、神田くんに吉井くん？ わたしがどうかしたんですか？」

姫路の声が後ろから聞こえる。

近くにいなかつたから平氣だと思つていたらやつぱ聞こえてたか。

「す、好きになる人がたくさんいそうだねつて言つてたんだよ。姫路さんには」

わあ、すゞく苦しい言い訳だな。いくらなんでも氣づかれるだろ。

「ふえ？ わたしを好きになる人がですか？」

あれ、そのまま続行！？ 姫路、怪しまないんだな。

「だつて、家庭的だし。優しいし」

家庭的か。料理以外だつたらできそつではあるよな。

「吉井くんは家庭的な人が好きなんですか？」

「そりゃあ、男ならみんなそうだよ」

心を胃袋で摑め！ つていうくらいだし。当たりつちやあ当たりか。

「そうですか。わかりました！」

姫路がめちゃくちゃ笑顔になつた。

あつ、褒められたから喜んでるわけか。そりや嬉しくて笑顔にもなるわな。

とにかく、『うじて雄』をやる氣にさせる作戦は終了した。

この後、雄一は霧島に再び追いかけられることになったが、それは俺には関係ない。

俺と明久と姫路への思い（後書き）

はい、今回は明久×瑞希をできるかぎり書いてみました。
実はこいつの書くの始めてでして。
うまくかけてたら嬉しいです。

とにかく、みなさんに質問なのですが、
実は健吾をいつたい誰とくっつけさせるか、全く考えておりません。
明久×瑞希、雄一×翔子、ムツツローーー×愛子は予定しております。
健吾のお相手は誰がいいですかね？ といつわけでそんなアンケートです

- ・木下 優子
- ・島田 美波
- ・清水 美春
- ・吉井 玲
- ・相手なし

辺りで考えています。誰がいいか、よければ答えていただけるとうれしいです。他にもぴったりのキャラがいるよ！ とかありましたら気軽に教えてください。

ついでに恋愛ネタを書くときの「シなどありましたら教えてくれる」とありがたいです

俺と雄一と作戦会議（前書き）

中嶋さん、タイラントさん、神夜 晶さん
感想ありがとうございます

今回はいつもよりもグダグダな文章の予感

俺と雄一と作戦会議

そんなこんなでただいま作戦会議中。当然、姫路はここにいない。明久の為に、パンケーキを作ると言つてはりきつて教室を出て行った。

まあ明久の自業自得だがな。

「姫路の転校を阻止するために、三つずつことがある」

雄一が指を三つ立てる。

「まずはFクラス 자체の環境だ。少なくとも、姫路が安心して勉強できる場所だとわかつてもらいたい」

「うぬ。最下層のクラスじゃからの。心配するじやろ」

Fクラスつてだけで悪い印象しかないからな。それをどうにかしないと。

「次に教室の環境だ。姫路の過ごしやすい環境にする必要がある。」「こんなほこりっぽい場所じゃあ、姫路さんの体調も悪くなる一方だしね」

隙間風の入る教室で、元氣でいろいろとほつが無理だろつな。

「最後にクラス内にライバルがいること。まあそれは健吾になるわけだが。とにかく姫路が学力向上を測れる環境にいることを両親に見せる」

「見せるって、どうするんですか？」

「「」れだ」

雄一がプリントを見せる。

カラフルな絵や文字が大きく書かれている。

「なにこれ？」

「文化祭に来たやつに試験召喚戦争を公開するらしい。これに誰かが健吾とコンビで出て欲しい。できれば決勝戦あたりにまで行ってほしい」

「そりすりや、姫路が上を田指せる環境にいることをわからせる」とはできぬか。

「でも誰が出んだよ。雄一か？」

「俺は出ねえよ。面倒くせえ」

「ウチも瑞希と出ることになつてゐるわ。瑞希、優勝してお父さんを見返してやるって言つてたわよ」

「ムツツリー」と秀吉は勝利のためにいろいろこなしてもいいはずだからな。開けといてくれ

つてことは……。明久と爽兄か。

「雄一。俺、勝てる気がしない」

「健吾、平氣だ。明久は盾になる」

「僕、ファードバックくるんだけど……？」

「俺だつて同じなんだから、お前が盾くらうことはなれよ。

「やして爽吾さんね……」

雄一の言葉に「ぐつと唾を飲む。

「お前と同じ血が流れている」

「同じ血が流れてても学力が同じとは限らないんだよおおおーー！」

そんな奇跡があるんだつたら秀吉はここにいねえよー。

まあ、どっか一人つて言うんだつたら。

「雄一、俺爽兄と出るよ」

「健吾！」

「その代わり、今日から文化祭までみっちり俺と勉強だからね。爽

兄」

文化祭まで日はない。徹夜で教えれば一桁くらいならいけるはず！

「健吾、明久。ちょっとついてきて欲しい場所があるんだが」

「雄一一人で行きなよ」

「お前だけで足り一パンケーキが焼けましたよ。みんなの分も焼いてきましたから」よしつ、行くぞ雄一！」

見えない。姫路も持つて一パンケーキなんて見えないぞ。

雄一についていくのはただ雄一が一人でかわいそうだと思つただけだ！

「坂本くんたち、どこか行くんですか？」

「ああ。明久は残るみたいだぞ」

「なに言つてるんだよ雄一。僕も行くよ」

明久の目が訴えている。置いていかないでと。

「つてことだ。悪いな姫路。明久も連れてくぞ

「あつ、はい」

あれ、雄一は明久を助けるなんて珍しいな。

とりあえず雄一についていく。教室から次々に散っていく戦友の断末魔が聞こえるが、聞こえないふりをしておこう。

もつすぐ冬休みー！

ということで更新を早くしつつ、もつ少し、しっかりとした文章を書けるようになります！

つて、もうすぐクリスマスか・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905w/>

バカとテストとショタ少年！？

2011年12月21日21時47分発行